

本書を書き終えて

全体を一応書き終えて編集者に原稿を渡したとき、「あとがきはどうするか」と問われて、まったく考えることなく、その昔、学校で習った「あやうこそ、ものぐるほしけれ」というフレーズが突然湧いて出た。兼行法師の意図したものとも、古文の「模範解答」とも違うかも知れないが、ずっと、現代の硯である PC に向かって、筆者が見聞きして感じたいろいろなことを書き綴って来たのだが、その想いが、読者とどのように共有されるか、また読者も漠然と感じているに違いない教育の現状への不安とどのように共鳴してもらえるか、期待への高揚と幻滅への不安が入り交じって、自然にその言葉が出たのであった。

筆者は本文で、数学の「表」と「裏」という対比を用いたが、この言葉遣いについてまずここでお断りしたい。世間では、普通は、「表」が外に向かう肯定的で明るい面であり、「裏」はこっそりと隠れている、否定的で陰鬱な側面とされている。筆者の亡き母はつねづね「裏表のない人間になりなさい」と教えてきたが、おそらくは、「裏」がない「表」をすっきりと生きるのを母は理想の男性像としていたのであろうといまは思う。

しかし、筆者、敢えて、この「裏」という言葉に新鮮な意味をもたせたいと思った。というのは、人生の古稀を越えようやく、「表」のために「裏」こそが重要であると思うようになったからである。

実際、政治・行政からマスコミに至るまで、最近は、「断固たる決断」「安全と安心」「実際に役立つ知識」のような耳に心地好い、しかし明るく軽い言葉ばかりが横行しているように感じられて強い危機感を感じている。先進国の少子化と開発途上国の人口爆発、先進国における政治の大衆迎合主義の潮流と開発途上国の政治の専制化と不安定化の揺れ、先進国における高度情報技術の一層の先進化とそれに伴う社会的格差の増大、……。これら、私達が直面する極めて深刻な事態は、その背景に、従来の社会設計の想定速度を上回る社会の変容という歴史的な要因をもつものであり、社会の「発展」、すなわち生産と消費の拡大という「表」については、ロボティクスの普及＝人間的人間の不必要化という先が見えてきて、しかもその流れを支えて来たエネルギーについては、すでに、資源の枯渇化と生命環境の悪化という、もっとも分かりやすい形で「裏」が明確に登場してきているのに、「太陽光エネルギー」といった明るい言葉に社会は浮かれている。**明るい言葉は、このような現実社会の直面している未来の暗さから目を背けている結果**に映る。

人々が表層の情報で愚民として操作され、文化の平板化、一様化が進行し、それに伴って、人々が自分の気に入る《類》へと集結するばかりで、大きな世界からは孤立、断絶する、という傾向が一層顕著に進行する中で、残される唯一の希望は、《教育》であるはずである。教育を通じてこそ、自己と他者のより深い理解が達成できるからである。

しかし、その教育にも、この《軽薄な明るさ》の波が押し寄せているのではないかと筆者がはじめて危機感をもったのは、愚かにも、齢五十に手が届きそうな頃であった。それでも、いまから見ると、だいぶ良かった。というのも、「誰もが勉強が得意になる教え方の上手な教師」、「いかなる問題に通用する解法の発想法」といったキャッチフレーズが恥知らずに喧伝されていた当時は、ウソと真実の見分けが付け易く、「甘い言葉に騙されるのも一つの夢」ともいえる牧歌的な時代であったからである。最近のように、「合格を約束する必修問題とそのベストな解法」とか「決して減点されて損しない答案の書き方の指導」となると、もはや夢どころの話ではなく、教育が、幻想・妄想を掻き立てる悪徳商法のレベルにまで墮落してしまっているように感ずる。そして、数学教育がそのような低俗な「教育ビジネス」の尖兵になっているような現状になんとか警鐘を発したいと思って書きはじめたものが本書である。

本書の最初のアイデアとなったものは、本書の冒頭第0章として挿入させていただいた「分かりやすいより大切なこと」というエッセイである。これは、いまから二十年以上も前に、この危機感を感じはじめた頃に、高校の先生方向けの講演の際の参考資料として、「難解な数学を分かりやすく教える」というということが理

想的であると信じて疑わない、当時の勃興してきた新風潮を揶揄することで、真剣な実力ある教員に声援を送りたいと願って書いたものである。

しかし、時代はさらに悪い方向へと進展してしまった。「合格すること」、そのために「点を取ること」が、若者の無条件の目標と見なされ、若者たちの口から、幼い理想や遙かな夢が消えた。「近頃の若者」は、幼い頃から、厳しい「現実」に直面し、その「現実」に「現実的に」対処する以外に自分の道がないことを、学校教育、特に数学教育を通じて叩き込まれているかのようである。

しかるに、唯一の救いは、数学はそのようにいくら「現実的」に考えても、それだけでは到達できない世界があり、他方、ほんのわずかでも、より深い《真実》に迫ろうと真正に努力すれば、それまで重く厚く見えていた「現実」の壁が軽々と吹き飛ばされる、という驚くべき経験に満ち満ちていることである。数学を勉強したことのある人間には自明なこの《真実》がひた隠しにされている現状に鑑みて、「現実」と《真実》の違いを対比的に描こうと思ったわけである。

もちろん、《真実》がわずかな紙数で描ききれはるはずもなく、ここに述べたのはあくまでも筆者を突き動かした動機の素描にすぎない。ここで論じた話題は具体化すればするほど、多くの詳細化、綿密化を要し、本書では、このような方向への努力は、放棄せざるを得なかった。これについては別の機会、そしてまた、別の若い論者の登場に期待したい。

未筆ながら、アイデアばかりで、実際の原稿の進まない著者をつねに励まし、辛抱強く次の原稿を待ってくださった亀書房、亀井哲治郎氏、筆者のラフなアイデアからときに素敵なスケッチ、ときに精密な図版を作ってくくださった亀井英子氏、眞木貴也氏に深く感謝する。

困難な時代にあって未来を啓くために苦闘している人にとって、著者は一介の素浪人ならぬ「素老人」にすぎないが、本書を通じて、力の限りの声援を送り、これからの《共闘》を提案したい。

2017年8月18日

亡き母の13回忌を前にして